

問い8 私は差別をしたことはありません。なぜ部落差別はなくならないのでしょうか。私は何をすればよいのでしょうか。

連研中央講師・福岡教区
志摩田 真生

「差別」は、人が生きていく力を奪う行為です。「差別」は、受けた人の居場所が奪われていく行為です。

宗祖・親鸞聖人は、「一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。」「『歎異抄』第五条(『註釈版聖典』p834)、「れふし・あき人、さまさまのものは、みな、いし・かはら・つぶてのごとくなるわれらなり。」「『唯信鈔文意』(『註釈版聖典』p708)と「御同朋」のあり方をお示しく下さいました。このテーマは「御同朋」と謳いながら差別をなくすどころか温存し、また加担し、見抜けずに過ごしてきた教団や僧侶の歴史が背景にあります。そしてそれは、今を生きる私と無関係ではありません。どうすれば差別をなくしていけるのでしょうか。私には、何ができるのでしょうか。

差別問題については、学生時代から年に一度は特別授業として学んでいた記憶があります。当時はただ授業を受けただけで、当事者意識はありませんでした。それでも中学生のころには「差別はいけない」という一定の考えが私の中に生まれていたと思います。とてもシンプルで「して(されて)いいはずがない」というものです。同時に「差別はなくさなければならぬ。そのためには差別をしている人間がいなくなればよい」と考えていました。

こうして書き起こすと、当時の私は「自分は差別をしない人間」というスタンスだったことがわかります。社会に出てからも、ずっとこの考えの中で過ごしていました。

その私が僧侶となり、基幹運動・「連研」にであったことで、価値観が大きく転換されることとなります。それは「差別し続けている自分」とのであいです。差別されることから解放されていくことは勿論ですが、差別をしている私からも解放されなければならない、と気づかされた「事件」と言える出来事でした。

いつの間にか、高いところから「差別をしている悪い奴はいないか」と裁く人間になっていたのかもしれませんが。私は紛れもなく「差別する側」の人間でした。そこから「差別し続けている私」と向き合う人生が開かれました。

「差別とは何か」を考えるときに、私は【いじめる・バカにする・仲間外れにする】ことだとお伝えしています。

子どもたちが小学校に入学するときに、それぞれ次のような願いを伝えてい

ます。

「仲間外れだけはしないでほしい。自分が仲間外れになったときはすぐに相談してほしい。誰かが仲間外れになったときは、できれば隣に座ってあげてほしい。それが怖い時は相談してほしい」

おおよそこのようなことです。子どもたちはそれぞれ

「うん、わかった」

と返事をしてくれました。

娘が小学3年生の時です。学校から帰ってくると、私のそばにやってきて、下を向いています。

「どうかしたの？」

と聞く私に、彼女は言いました。

「今日ね、お友だちが仲間外れになった」

小さな声で話し始めてくれました。

「だからね、私、隣に座りにいったよ」

彼女は、私の願いをそのまま受け止めてくれていました。

「そしたらね、帰りの時は、もうみんなそんなことしなくなってた」

そっと隣に座る。たった一つの行動が、固まりかけた空気を動かしたのでしょうか。その行動と、それを聞かせてくれたことが嬉しくて、頭を撫でながらお礼を伝えました。

「そうか、ありがとうね」

そのとき、彼女は震えていました。

「でもね…、とっても怖かった」

涙を流しながら教えてくれました。

私が気づかされた大切なことを子どもたちに伝えたのですが、その現場に居合わせた時に、何が起きるのかわかりません。どんな目で見られるのだろうか？自分に向けられるかもしれない、そんな怖さもきっとあったのでしょうか。もし小学生の私がある場にいたら、見て見ぬフリをしてしまいそうな気がします。大人と呼ばれる今なら大丈夫、とも言いきれない私がいるかもしれません。その場に、現実的に「身を置く」ことの意味をあらためて考えさせられた出来事でした。

最初に書いていますが、私自身がまだまだ解決できていない現実があります。その自分に向き合い続ける、すなわち自分自身への問いかけだけは続けていきたいと思っています。自らの内面（闇）と真摯に向き合い続けることは、楽ではありません。しかし、それこそが「照らされ育まれて」生きる姿なのではないかといただいています。

「差別」は、さまざまに形を変えて潜んでいます。世の中のどこかに、ではな

く「私の中」に。現在、新型コロナウイルス感染者、濃厚接触者、関係者へと向けられる差別も顕在化しています。お一人おひとりの「私」は、どう考えられていたでしょうか。私自身も傍観者ではなく当事者として、自身の内側へ問いかけてみようと思います。

その行為や発言が差別だと「気づくことができる私」、気づいたら「謝る私」、そして間違ったことを「あらためていく私」に向かっていくための問いだと考えます。

問い8 私は差別をしたことはありません。なぜ部落差別はなくならないのでしょうか。私は何をすればよいのでしょうか。

連研中央講師・岐阜教区
巖后 範之

○差別について考えたことがありますか。

話し合い法座で「部落差別について考えることがありますか？」との問いに「今まで知らなかった」「話には聞いたことがあるが、身近にないので考えたことがない」という意見が多いように感じます。しかし、そこに「差別をやめてほしい」「差別をなくしたい」と言い出したくても、言い出しにくい方がおられることを私たちは知っておかねばなりません。部落差別は長い年月をかけても無くなることなく、今もなお行われています。インターネットや SNS が発展した今日では、より陰湿化し、わかりにくく差別が行われている現実があります。

このテーマは「なぜ部落差別がなくならないのでしょうか」という部落差別に限ってなくすためのテーマととられることも多いようですが、このテーマから、部落差別をはじめとし、あらゆる差別をなくし、差別をしている私からも解放されていきたいという「差別・被差別からの解放」を阿弥陀さまの願いとおはたらきの中で生きる私たちがともに考えさせていただくテーマだと思えます。

○私は差別をどのように受け止めているのでしょうか。

組連研を開催される時、12 の問いのテーマで、差別のテーマが難しく組連研では取り上げにくいとの意見を聞くことがあります。「差別」ということが、難しいと考えられるのは「差別」を私たちが身近に感じることなく、いつの間にか社会の問題としているからではないでしょうか。しかし、身近なことをよく見てみると、部落差別や、いじめの問題、近ごろでは新型コロナウイルスの感染者差別などさまざまに問われています。「差別」が人の尊厳やいのちをも奪ってしまうことに向き合い、互いに安心して生き抜くことのできる社会をめざすことが大切なのでしょう。「私は差別をしていないから」「私の身近にはないから、私には関係がない」という思いや、現実にある差別に気づかず、知らないふりをしていくことが、差別を見過ごし、無くなることのない要因なのかもしれません。

○差別の法座を「難しい法座」「きびしい法座」と思っていないですか。

「差別」が良いことか？悪いことか？と問うたとき、きっと大勢の方が「悪いこと」と答えられるのでしょう。

悪いこと、したくないことというのが明確にわかっているのに、差別が行われている現実を社会の問題として受け流してしまうことは、見過ごし、差別してい

くことと同じなのかもしれません。

以前、「差別」の話し合い法座の中で大切な学びをしました。「差別を見過ごすことは、していることと同じである」という言葉です。

現実に気づかないところで差別が行われ、苦しみ、現実と闘い続けられていることを間近に見ることがない中で、実は「身の回りにある差別を見過ごし、差別をしていない気持ちになっていたのではないかと、自分自身に問いかけるきっかけとなりました。考え、問うていくとき、決して難しい問題として受け止めるのではなく、私の問題として学び、考え、行動していきたいと思いました。

○話し合い法座での温かい出会い

随分と前のことですが、僧侶の教修（教師教修）で受講しておられた方が法座の中で、自分の思いとして

「私は、子どもたちが好きで先生になることを選びました。その子どもたちが差別に苦しみ、悲しみをもたないよう、私は差別をなくします」と自分の思いを話してくださいました。この言葉に、差別をなくしていくことは、まず、差別をしない、見逃さない私になるということが大切であると教えていただきました。私自身もともに差別をなくしていきたいという思いを新たに感じ、今現在も思いの支えとなる大切な時間でした。

○私たちは、何をめざしていくのでしょうか。

さまざまな差別が伝えられています。民族差別や性差別、障がい者差別・ハンセン病差別や、現在では感染症による差別などまだまだ多くの現実があります。この問題の現状は、時代とともに複雑になり、より分かりにくいところで、多くの方が苦しみや悲しみ、また、いつ自分が差別をされるのかわからない不安をもって生活しているのでしょう。

時に「なんでも差別問題にしてしまう」との発言もありますが、差別に苦しみ生きていくことは、当たり前生きていきたいという本来誰もがもつ生き方を否定し、いのちや尊厳をも奪われているのです。

「連研」の中で「差別」をテーマに話し合うことは、お互いの思いを聞き合い、自分の思いを話すことです。

そこには、今まで気づかなかったことや、自分の思いとは違う思いの方がおられることに気づくことでしょう。

お互いが、思い思いのことを話し合うのは大切なのですが、会話の中で差別的な言葉を聞いたとき、そのことを指摘するのか考えてしまうことがあります。また、自分が気づかぬうちに発言していることもあります。そんなときに、お互いが指摘し合えることも「連研」での学びとなり、差別についての正しい理解や学びを続けていくことが大切です。

「差別する者がいるから、差別を受ける苦しみが生まれる」のです。する者がいなくなると、されることもないのでしょう。当たり前のようなことですが、今なお部落差別をはじめとしたさまざまな事象が起こっているということは、現実に行われているからです。

「何が差別であるか」を考えていくことは、正しく現実を聞き、正しい学びを勧めていくことが大切であると教えていただきました。

私たちがともにめざしていくことは、差別をなくすとともに、差別をしている私からも解放されていきたいという「差別・被差別からの解放」です。誰もが安心し心豊かに生きていける世界をめざし、「差別」を一緒になくしていきましょう。